



大阪府立
八尾翠翔高校

進路指導体制の組織化

生徒の可能性を信じ 組織的な指導で 高い目標へいざなう

◎大阪府立八尾東高校と大阪府立八尾南高校が統合し、2002年に普通科総合選択制として開校。06年度には、「知的障がい生徒自立支援コース」を設置した。部活動加入率が7割を超えるなど、文武両道を重んじる。

設立	2002(平成14)年
形態	全日制／普通科総合選択制／共学
生徒数	1学年243人
11年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、大阪大、大阪教育大、和歌山大、大阪府立大などに7人が合格。私立大は、同志社大、龍谷大、関西学院大、関西大、近畿大などに延べ262人が合格。
住所	〒581-0885 大阪府八尾市神宮寺3-107
電話	072-943-8107
Web Site	http://www.osaka-c.ed.jp/yaosuisho/

変革のステップ

背景	実践	成果
◎府立の2校が統合して普通科総合選択制の高校として開校。生徒も教師も実力の限界を決めてしまい志望が高まらない	◎諦めさせない学習指導と、学習規律を守らせる生徒指導を徹底。教師のチームワークを重視して指導体制を整える	◎国公立大をはじめとする大学合格者数が増加。保護者や中学校から、生徒を安心して通わせられる高校としての評価が定着

新しい学校を
ゼロからつくり上げる

大阪府立八尾翠翔高校は、大阪府立八尾東高校と同八尾南高校が統合再編し、2002年4月に「普通科総合選択制」という新しい高校として誕生した。1年次はどの生徒も共通の履修科目だが、2年次からは「英語専攻」「国語専攻」「社会専攻」「理数専攻」「初等教育専攻」「看護医療専攻」「体育専攻」の7エリアから一つを選び、「エリア指定科目」と「自由選択科目」を組み合わせて履修するカリキュラムとした。

初代の校長は、2校の指導体制を一新し、難関大進学に対応する高校をゼロからつくり上げていく方針を掲げた。まず学力向上を目指し、1コマ45分間×7時間授業とし、朝学習に「教養テスト」を行った。「教養テスト」は毎朝10分間で行う小テストで、内容は英単語や英文法、漢字の書き取りや数学の計算問題などだ。採点は空き時間のある教師が昼休みまでに行い、結果をパソコンで入力。20点満点で16点以上を合格とし、不合格者は放課後、教室に残して合格するまで追試や課題を行った。2学年主任の鳥羽弘美先生は当時を次のように振り返る。

「本校の生徒は、必死に勉強しなくても中学校までは中位の成績を取れていた者がほとんどです。必然的に、学習に向かう姿勢が身に付いていないという課題がありました。そ

ここで、何度も繰り返し学ぶことで、まずは学習の型を身に付けてほしいと考えました。『合格するまで帰さない』という徹底した姿勢も、生徒の学習に向かう力を育てていったと思います。また、部活動が盛んな本校の特色を生かし、不合格になると、放課後の部活動に行



大阪府立八尾翠翔高校
中須賀敬子 Nakasuga Keiko
教職歴29年。同校に赴任して8年目。進路指導課長。「生徒の可能性をどこまで信じて」「ほんまもん」を追求していきたい」



大阪府立八尾翠翔高校
辻光男 Tsuji Mitsuo
教職歴33年。同校に赴任して9年目。首席。生徒指導課長。「社会に出た時に、誰からも信頼され愛されるような生徒を多く育てていきたい」



大阪府立八尾翠翔高校
竹内彰 Takeuchi Akira
教職歴28年。同校に赴任して9年目。3学年主任。「分からないと諦めてしまえば前に進まない。生徒に諦めさせない指導をしていきたい」



大阪府立八尾翠翔高校
鳥羽弘美 Toha Hiromi
教職歴36年。同校に赴任して9年目。指導教諭。2学年主任。「良いと思ったことは一人でもやり始める」



大阪府立八尾翠翔高校
小林嘉夫 Kobayashi Yoshio
教職歴35年。同校に赴任して10年目。1学年主任。「生徒と楽しく会話をし、生徒と夢を語っていき

けなくなることを伝え、どの部にも『教養テスト』にしっかりと取り組もうという雰囲気醸成していきました」
進路指導課長の中須賀敬子先生は、『教養テスト』の効果を次のように話す。

「これまで学習に真剣に取り組む機会がなかった生徒にこそ、こまめに声を掛けていきました。これにより、生徒は『見捨てられていない』と感じたようです。私自身、遅くまで学校に残ることもあり、くじけそうな時もありましたが、諦めずに頑張る生徒や同僚の先生の姿に勇気をもらいました」(中須賀先生)
学習指導と併せて、生徒指導も徹底した。生徒指導課長の辻光男先生は、その方針を次のように説明する。

「生徒指導は、問題のある生徒のためにするのではなく、生徒を支援し伸ばすために行うものです。学習指導と生徒指導を別物と考えず、両輪として捉えることによって生徒の希望進路を実現させようという考えです」
特に徹底させたのは、携帯電話の校内持ち込み禁止だ。生徒が校内で携帯電話を持っているのを見かけたら、例外なく没収し、後日、保護者に返却する。

「服装の乱れや携帯電話の持ち込みは、生徒、教師双方の授業への集中を乱すことにつながります。当たり前のことの徹底こそが学習の効果を高めるのだと信じ、指導を続けま

した」(辻先生)

入学前の合格者登校日と入学式の2回、こうした学校での生徒指導上のルールをきちんと説明しているため、保護者からの苦情などはほとんどないという。

限界を決めず 生徒の力を信じる指導に転換

学習指導と生徒指導を厳しく行ったことにより、地域の中学校や中学生の保護者には「子どもを安心して通わせられる高校」という評判が広がっていった。しかし、創設期には、まだ乗り越えるべき課題があった。生徒は「自分の力はこの程度」と自ら限界をつくり、教師も進学校への脱皮を果たせるのか半信半疑のまま、改革を進めていたのである。3学年主任の竹内彰先生は次のように振り返る。

「生徒の学力と目標としたい進路には大きな差があると感じました。私立大型の3教科に絞って学習させた方が目の前の生徒の力を伸ばせるのではないかと迷ったこともありましたが、他の先生方に『生徒を信じてみよう』と言われ、心が決まっていきました」

生徒と教師の意識改革としてまず着手したのは、難易度の高い教科書の採用だった。中須賀先生はその意図を次のように語る。

「私は創立3年目に赴任し、英語の授業を

担当するうちに生徒の潜在能力の高さを感じました。当時採用していた教科書では、生徒の力を十分伸ばせないのではないかと思い、大阪府の公立高校が採用する教科書を全て洗い出して一覧表にまとめ、本校の生徒の学力を最大限に伸ばすために適切な教科書はどれかを検討しました。教科書の難易度を高めることで、生徒も教師も進学校で学び、教えているのだという意識改革につながりました」

また、3期生の学年主任だった鳥羽先生は、生徒に毎日の学習時間を記録させ、週1回の提出を義務づける「日課表」を始めた。鳥羽先生が学年全員分の学習時間を入力したデータから、学年団は生徒の変化を把握し、「頑張っているな」「最近、どうした?」といった声掛けを行うことに活用している。

「こまめな指導により、生徒は学校を信頼し、自信を付けていきました。そして、生徒の変化が教師の意識を変えていく様子が見て取れました」(鳥羽先生)

低学年からの指導で 社会や将来を考えるきっかけにする

進路指導の体系化にも着手した。まず、入学前の課題として入学時に「職業人インタビュー」を出す(図)。就労者に仕事内容ややりがい、苦労話などを聞いてB4版1枚にまとめ、

入学式当日に提出させる取り組みだ。更に、2年次で7つのエリアから自分の進路に合ったエリアを選択させることを見越して、1年次の4月に行う2泊3日の宿泊研修では、2年次で自分がどのエリアに進むかを考え

させた上で2年次の仮想時間割を作らせる。

「『職業人インタビュー』も時間割の作成も、将来を考えさせるきっかけになっています。生徒は私たちの思う以上に社会のことを知りません。将来へのアンテナを張り、新聞やテレビを見たり、自分の周りにいる大人の仕事を意識的に調べたりするための訓練にしたいと考えています」(竹内先生)

1年次の2学期にはエリアを決定し、2年次からはエリア指定科目を履修する。以前は必修科目が少なく、生徒の科目選択の自由度の高さが進路選択の幅を狭めてしまうケースがあった。例えば、苦手科目を「捨てて」いたために、国公立大に挑戦すらできないという問題が起き

図 「職業人インタビュー」のワークシート

「職業人」インタビュー ワークシート

REPORTERは 氏名

(1) インタビューした人の職業(具体的に) コンピューターの管理とシステム開発

その人が現在の職業について何年ですか? 10年

(2) その人が現在の職業に就くまで

どのような高校生活を送りましたか?	ラグビー部で、努力をおまわりの人が見てくれて、充実した生活を送っていました。
どうして現在の仕事に就いたのですか?	今の会社のシステムを作って、その会社の人に認められたが。
「職業選択のポイント」は何だったのでしょうか?	作ることが好きだから。

(3) インタビューした人の現在

この職業に求められる資格や免許はありますか?	情報処理技術者
この職業に求められる知識や技能は何ですか?	会社の業務を熟知し、それをシステムに置きかえる能力。
この職業のどのようなところに魅力を感じていますか?	自分が作ったシステムをみんなが使って便利になること。
この職業に求められる性格的な適性を教えてください。	システムに障害がなくても、パニックに行き詰るような状況で適性を発揮すること。
この職業の楽しさを教えてください。	システムの開発や問題を直すのが面白く、スピードや正確さが求められること。
仕事について考えるようになったのはいつ頃からですか?	高校のとき。
仕事をやるようになって大きく変化したことは何ですか?	何事にも逃げなくなったこと。
仕事をしていて辛いことはありますか?	最後には自分でやらなければならないこと。
学生時代に知りたかったこと、仕事に就いたこと、または今後活かしていることがあれば教えてください。	プログラムを組む技術を学んだこと。
人生を振り返ると大切にしていることは何ですか?	義理と人情。

上図は左面。右面には、「自分にとって働くとはなにか」「現在、興味を持っている職業」などを書き込む欄がある
*学校資料を抜粋して掲載

ていたのだ。しかし、この10年間でカリキュラムの改善を図り、現在ではどのエリアを選んでも、大学受験に対応できるよう整備した。

指導のPDCAを回す 体系的な進路指導体制を構築

進路指導の体系化を進めるために、PDCAサイクルを回すことも重視した。年度始めに各学年で目標を立て、節目ごとに目標と現状を照らし合わせる。これは、生徒の定点観測を可能にするスタディーサポートや模試の全員受験により実現できた。結果の返却後には分析会を、学年発足時や三者面談前には「進路方針確認会」

を開き、目標に対して何が足りないか、どのような手立てが必要かを話し合う。

更に、年度末には学年団全員で目標に対する振り返りを行い、そのまともを進路指導課に提出する。この各学年の総括を基に、進路指導課で総括会を開き、次年度に向けた改善点を洗い出し、運営委員会を経て、職員会議で検討する。

また、進路指導課、各学年主任、首席（*）による学年主任会議と、学年主任、進路指導課による3年進路連絡会議を、それぞれ週1回、時間割に組み込んでいる。指導の効果検証を定期的に行い、学校全体の足並みをそろえるためだ。

「取り組みを単体で終えるのではなく、一つひとつ検証する場を設けて、次の手を考える必要があると思いました。進路指導課と学年団が密に連携を取り、全ての教師が同じ目線で指導しやすい環境づくりにつながっていると認識しています」（中須賀先生）

全国何十万人の受験生と 同じ土俵に立たせたい

生徒の意識を高めると共に、教師にとっても大きな目標としているのが、センター試験の受験率である。その理由を中須賀先生は次のように話す。

「全国で何十万人が同じ時間に同じ試験を受けるセンター試験は挑戦すること自体に意

義があると思う、本校の生徒をその土俵に上げてあげたいと考えました。将来、社会人になり、同学年と『センター試験の日は雪だった』『英語が難しかった』といった話題にな

った時に話の輪に入れることも、大切ではないでしょうか。また、入学後は一般入試も推薦入試も関係なく、さまざまな学生と一緒に学びます。推薦入試で合格している生徒に、『ゴールは大学合格ではない。入学後こそが勝負であり、一般入試を突破して入学した学生に引け目を感じないためにもセンター試験を受けよう』と話す

と、一般入試を受ける生徒と共にセンター試験を目指し、最後まで学び続けるようになりました」
このような指導の結果、センター試験の受験者数は、1期生が20人台、2期生が60人台、3期生では目標だった100人を超えた。

諦めない指導を貫きながら 生徒の力を伸ばし続ける

3期生は、教師の諦めない指導が結果につながった学年でもあった。国公立大合格者の中にも、2年生の秋までは学習に意欲を見せず、自身の限界を決めて進路も「入れるところでもいい」と答えていた生徒がいた。そのような中、当時の学年の教科担当だった小林嘉夫先生が、粘り強く向き合い、志望校を問い続けると、「大阪教

育大に行きたい」と答える者がいた。そこで、小林先生は数学の課題を渡し、毎日昼休みにきめ細かく指導した。生徒は解ける問題が増えるにつれ意欲的に学習に取り組みようになり、3年生の夏休みからは受験勉強に集中し、見事、志望校に合格した。

「確かに難しい挑戦ではありましたが、私は決して生徒に『無理だ』とは言いませんでした。教師が毎日声を掛けて、指導していけば、生徒もそれに応えようとしています。教師が生徒を信じ、生徒自身にも自分の力を信じてあげることが何よりも必要だと実感しました。このような先輩の姿を見て、後輩の生徒たちも『自分たちもやれば出来る』という気持ちを抱くようになり、学校は良くなっていくのだと思います」（小林先生）

開校以来、生徒に「無理だ」と言わない粘り強い指導を貫いてきたこと、P D C Aサイクルをしっかりと回してきたことは、「チーム八尾翠翔」として教師集団の結束力を高めてきた。今後の目標は、生徒の希望進路を実現すると共に、社会人になってからも活躍できる人間を育てることだ。

「今では、遅くまで学校に残って学習し、前向きに志望を語る生徒が格段に増えました。この信頼関係を維持しつつ、大学入学後も見据えて、生徒を伸ばしていくこそが、私たちの使命だと考えています」（鳥羽先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年9月号指導変革の軌跡「埼玉県立浦和西高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)